

# 高等学校用教科書「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における近代短歌教材

貞 光 威

## *Tanka* as Teaching Materials in Senior High School Textbooks Japanese I and II

Takeshi Sadamitsu

### Summary

Japanese I and Japanese II are newly established subjects after the curriculum reorganization in 1982. Currently seventeen different kinds of Japanese textbooks are being published by various publishers. The textbooks for Japanese I have been in use since 1982 and Japanese II since 1983.

This is a study on the treatment of *tanka* (thirty-one-syllable Japanese verses) in these seventeen textbooks.

The following are the survey items :

1. The number of *tanka* included in each textbooks.
2. Names of poets appearing in each textbook.
3. Names of textbooks in which a particular *tanka* appears.
4. The frequency of a particular *tanka* appearing in various textbooks.
5. Characteristics of the mode in which *tanka* are treated as teaching materials in each textbook.

The treatment of *tanka* in Japanese I and II can be characterized in the following manner :

1. Many of the poets included in the textbooks are by the poets of the Showa period.
2. There is a strong tendency to include the works of Mokichi Saito.
3. There is a tendency to include a series of *tanka* on a given subject matter composed by several different poets.
4. Some of the *tanka* are taken from the reader's column of the culture section of newspapers.

Merits and demerits of these four points are also discussed in this article.

*Received April 30, 1986*

## 1. はじめに

この稿は高等学校の「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」の教科書において近代短歌に関する教材がどのように取り扱われているかを、各出版社から発行されているすべての教科書17種について調査し、その特色と問題点について考察したものである。

高等学校の「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」という科目は、新しい「高等学校学習指導要領」に基づいて新設された科目なので、まずその辺の事情について述べておくと、文部省では昭和53年8月30日に「高等学校学習指導要領」の改訂と学校教育法施行規則の一部改訂を行ったが、この教育課程についての新しい基準は昭和57年度から学年進行によって適用された。

昭和53年に行われた「高等学校学習指導要領」の改訂は、昭和51年12月18日に教育課程審議会が行った「小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改訂について」と題する答申に基づいて実施されたもので、国語科の場合について見ると、言語の教育であるという立場を明確に打ち出し、言語表現の能力を高めることを重視して、これまでのものに比べて目標と内容を精選することをねらっているのが特色である。

科目の編成もその観点から大幅な改訂が加えられ、「国語Ⅰ」とそれにつづく「国語Ⅱ」を設けて国語の基礎的な能力を高めることを目指し、その発展として「国語表現」・「現代文」・「古典」の3科目を設けて、生徒の適性・進路などに応じて選択履習させることが考えられている。

このうちの「国語Ⅰ」は高等学校国語教育のかなめになる科目として位置づけられており、すべての生徒に履習させる必修科目とされている。中学校の国語との連関を密接に保ちながら、その内容をさらに発展させたもので、これまで行われてきた「現代国語」と古典に関する科目の基本的な内容を整理して構成された総合科目と規定しており、第1学年において履習させることを原則としている。

「国語Ⅱ」は選択科目であるが、「国語Ⅰ」に引き続いて履習することが望ましい、いわば「準必修科目」として位置づけられており、「国語Ⅰ」との密接な連関のもとに総合的な国語力をさらに高めることを目標にしている。

このような新学習指導要領に基づいて作られた高等学校用教科書は、「国語Ⅰ」は昭和56年の検定に合格したものが昭和57年度から現場で使用されるようになり、「国語Ⅱ」は昭和57年の検定に合格したものが昭和58年度から使用されるようになった。その後3年を経てその改訂版が作られ、「国語Ⅰ」は昭和59年の検定に合格したものが60年度から使用されるようになり、「国語Ⅱ」の場合は、昭和60年の検定に合格したものが、61年度から使用されている。

以上のように高等学校用教科書「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」は、新指導要領に基づいて初めて姿を見せたところの昭和57・58年度から使われるようになったものと、昭和60・61年度から使われるようになった改訂版とが存在する。そして今日、高等学校の現場では改訂版とともに、昭和57・58年度から使用されている元の版も一部用いられているのであるが、今回の調査ではもっぱら元の版のみを対象として、新学習指導要領に基づいて初めて作られた昭和56・57年度の検定に合格した教科書が、それ以前の「現代国語」教科書と近代短歌の教材としての扱いにおいてどのように違うかを見ることに

して、改訂版については別の機会にゆずりたい。

今回、考察の対象として取り扱うことにした「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」の教科書は、下の〔表1〕のように13の出版社から発行された17種類である。この表の17種類の教科書の配列の順序は、文部省発行の『高等学校教科書目録』における配列に従った。

なお、〔表1〕には発行所・書名・著者のほかに、「教科書の略称」を記した。これは、あとの〔表5〕「作品別に見た掲載状況」において、それぞれの短歌がどの教科書に掲載されているかを一覧表の形で示すためのものである。文部省発行『高等学校教科書目録』にも略称が記されているが、それは「発行所の略称」であって、この〔表1〕の「教科書の略称」と同じではない。1社から2種類の教科書を発行している場合など、教科書を区別するために〔表1〕では別の略称を用いた場合があるし、略称はすべて漢字を2字に統一した。

〔表1〕「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」教科書一覧



符号	発行所	書名	教科書の略称	著者
A	東京書籍株式会社	国語Ⅰ・Ⅱ	東書	高田瑞穂・阪倉篤義ほか15名
B	学校図書株式会社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	学図	吉田精一・阿川弘之・野地潤家ほか12名
C	株式会社 三省堂	新国語Ⅰ・Ⅱ	三省	広末保・金谷治ほか17名
D	教育出版株式会社	国語Ⅰ・Ⅱ	教出	五味智英・中村真一郎ほか15名
E	光村図書株式会社	国語Ⅰ・Ⅱ	光村	石森延男・井上靖ほか13名
F	株式会社 大修館書店	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	大修	馬淵和夫・佐伯彰一・鎌田正ほか20名
G	株式会社 明治書院	基本国語Ⅰ・Ⅱ	明基	市古貞次・長谷川泉・築島裕ほか32名
H	株式会社 明治書院	精選国語Ⅰ・Ⅱ	明精	市古貞次・長谷川泉・築島裕ほか32名
I	株式会社 右文書院	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	右文	阪本浩・竹岡正夫・松村博司ほか20名
J	株式会社 筑摩書房	高等学校用国語Ⅰ・Ⅱ	筑摩	秋山虔・猪野謙二・分銅惇作ほか4名
K	株式会社 角川書店	高等学校総合国語Ⅰ・Ⅱ	角総	吉田精一ほか18名
L	株式会社 角川書店	高等学校精選国語Ⅰ・Ⅱ	角精	吉田精一ほか18名
M	株式会社 旺文社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	旺文	松村明・新聞進一・岡保生ほか16名
N	株式会社 尚学図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	尚学	山本健吉ほか5名
O	株式会社 尚学図書	高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ	尚新	山本健吉・前野直彬・三好行雄ほか3名
P	株式会社 第一学習社	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ	一新	稲賀敬二・市川孝・竹盛天雄ほか14名
Q	株式会社 第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	第一	稲賀敬二・市川孝・竹盛天雄ほか14名

## 2. 各教科書における近代短歌教材

まず最初に、17種の教科書がそれぞれ現代短歌教材にどの程度の比重を置いているかを大まかに知る手がかりとして、収載する現代短歌作品の数と、近代短歌の鑑賞文や歌論を収載しているか否かを調べてみると、下の〔表2〕のようになる。

〔表2〕 収載する近代短歌の数と鑑賞文等の有無

	発行所	書 名	短 歌			鑑 賞 文	
			国語 I	国語 II	合計	国 語 I	国 語 II
A	東京書籍	国語 I・II	/	30首	30首	/	—
B	学校図書	高等学校国語 I・II	30首	/	30	—	/
C	三省堂	新国語 I・II	/	10	10	/	—
D	教育出版	国語 I・II	12	10	22	—	歌を作る覚悟 斎藤茂吉
E	光村図書	国語 I・II	/	12	12	/	—
F	大修館	高等学校国語 I・II	22	/	22	—	/
G	明治書院	基本国語 I・II	15	15	30	—	—
H	明治書院	精選国語 I・II	15	15	30	—	—
I	右文書院	高等学校国語 I・II	22	21	43	—	—
J	筑摩書房	高等学校用国語 I・II	/	31	31	/	無名者の歌 近藤芳美
K	角川書店	高等学校総合国語 I・II	21	21	42	—	—
L	角川書店	高等学校精選国語 I・II	15	15	30	—	—
M	旺文社	高等学校国語 I・II	/	20	20	/	様々の白—短歌を 読む楽しみ— 佐佐木幸綱
N	尚学図書	高等学校国語 I・II	15	15	30	短歌の鑑賞 武川忠一	折々のうた 大岡 信
O	尚学図書	高等学校新選国語 I・II	21	15	36	短歌の鑑賞 吉野秀雄	折々のうた 大岡 信
P	第一学習社	高等学校新国語 I・II	20	/	20	現代短歌にみる 青春 佐佐木幸綱	/
Q	第一学習社	高等学校国語 I・II	18	/	18	—	/

上の〔表2〕の「短歌」および「鑑賞文」の欄の斜線（）は、その教科書に近代短歌を教材として載せていないことを示す。また、「鑑賞文」の欄の横線（）は、近代短歌を教材とする単元は設けられているが、そこに鑑賞文や歌論の類が載せられていないことを示す。

この表を見てわかるように、17種類の教科書は、いずれも少なくとも「国語 I」か「国語 II」のどちらかにおいて近代短歌を教材として載せており、約半数にあたる8種類の教科書では「国語 I」と「国語 II」の両方に近代短歌の教材を置いている。

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に近代短歌の教材を置いている教科書の中には、右文書院の「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」の43首、角川書店の「高等学校総合国語Ⅰ・Ⅱ」の42首、尚学図書の「高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ」の36首というように、かなり多くの短歌を載せている教科書が見られる。

その反対に、載せている近代短歌の数の少ないものとしては、三省堂の「新国語Ⅰ・Ⅱ」の10首、光村図書の「国語Ⅰ・Ⅱ」の12首などがある。

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」とを合わせると、17種類の教科書には延べにして456首の近代短歌が収められているから、教科書1種類の平均歌集は26.8首ということになる。ただし、これらの歌の数の中には、鑑賞文や歌論の中に引用された近代短歌は入っていない。

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の教科書の中には、近代短歌の単元に、短歌作品のほかに鑑賞文や歌論を載せているものがあり、6種類の教科書が、次のような8編の文章を載せている。

D	教育出版	国語Ⅱ	斎藤茂吉	「歌を作る覚悟」
J	筑摩書房	高等学校用国語Ⅱ	近藤芳美	「無名者の歌」
M	旺文社	高等学校国語Ⅱ	佐佐木幸綱	「様々の白一短歌を読む楽しみ」
N	尚学図書	高等学校国語Ⅰ	武川忠一	「短歌の鑑賞」
N	尚学図書	高等学校国語Ⅱ	大岡信	「折々のうた」
O	尚学図書	高等学校新選国語Ⅰ	吉野秀雄	「短歌の鑑賞」
O	尚学図書	高等学校新選国語Ⅱ	大岡信	「折々のうた」
P	第一学習社	高等学校新国語Ⅰ	佐佐木幸綱	「現代短歌にみる青春」

この表からは、尚学図書から発行されている「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」および「高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ」が共にⅠとⅡとの両方に鑑賞文のたぐいを載せて、生徒の近代短歌の理解を助けようとしていることが注目される。

なお、ここで筑摩書房の「高等学校用国語Ⅱ」に収められた、近藤芳美の筆になる鑑賞文「無名者の歌」について触れておくと、この文章は昭和30年以来、朝日歌壇の選者をつづけてきた筆者が、その著『無名者の歌』(昭49刊)をもとに、最近の選歌も加えて書き下ろしたものである。9首の入選歌について鑑賞しているが、そのあとに7首の入選歌を掲げている。7首の短歌は高校生とほぼ同じ年齢の人々の作が多く、身近な題材を詠じた7首の歌は、生徒たちの関心をひくものがある。学習意欲を高めるであろう。専門の歌人の作ではなく、また鑑賞文のあとに付録の形で載せられているにすぎないが、7首の歌は立派に教材として扱うことができるであろう。〔表Ⅱ〕では筑摩書房が載せている短歌の数は31首となっているが、この7首を加えると38首ということになり、掲載歌数の多い方から数えて3番目になる。

今まで見てきたように17種類の教科書の中には、「国語Ⅰ」か「国語Ⅱ」のどちらか一方で近代短歌を扱うものもあり、また両方で扱うものもある。そのほかに、近代短歌を鑑賞した文章や歌論を載せるものもあって多様である。そのために教科書で近代短歌について用いているページ数も3ページから19ページまでいろいろとある。各教科書が近代短歌にどの程度の比重をかけているかを知るおおよその目安として近代短歌にさいているページ数の少ないものから多いものへと順に並べたものが

〔表3〕である。ただし、この数字はごくおおまかなもので、厳密なものではない。教科書によっては1ページに短歌を10首とかそれ以上を載せているものもあるが、中には挿し絵や写真を入れて、1ページに2首を載せるだけといった場合もあるからである。なお、鑑賞文の中には近代短歌のほかに、古典和歌や近代俳句もいっしょに鑑賞したものがあがるが、その場合は、近代短歌に関する部分のページ数を概算した。

〔表3〕 近代短歌のために用いているページ数

	発行所	書名	国語Ⅰ	国語Ⅱ	合計
C	三省堂	新国語Ⅰ・Ⅱ		3ページ	3ページ
E	光村図書	国語Ⅰ・Ⅱ		3	3
A	東京書籍	国語Ⅰ・Ⅱ		6	6
Q	第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	6ページ		6
F	大修館	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	7		7
G	明治書院	基本国語Ⅰ・Ⅱ	4	4	8
H	明治書院	精選国語Ⅰ・Ⅱ	4	4	8
L	角川書店	高等学校精選国語Ⅰ・Ⅱ	4	4	8
B	学校図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	9		9
I	右文書院	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	4	5	9
D	教育出版	国語Ⅰ・Ⅱ	4	6	10
K	角川書店	高等学校総合国語Ⅰ・Ⅱ	5	5	10
M	旺文社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ		14	14
P	第一学習社	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ	15		15
J	筑摩書房	高等学校用国語Ⅰ・Ⅱ		17	17
N	尚学図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	8	9	17
O	尚学図書	高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ	11	8	19

### 3. どの歌人の歌を採っているか

前の第2章では、それぞれの教科書が近代短歌を何首ほど教材として載せているか、そしてそのために約何ページをあてているか、ごくおおまかに眺めてきたが、この章ではもう少し詳しく、どの歌人のどの作品を近代短歌教材として採っているか調べてみたい。

その手はじめとして、最初に17種類の個々の教科書について、近代短歌の単元の構成を眺めて、どの歌人の歌を何首のせているか、歌人のうちで主として昭和になって活躍した歌人の比較的新しい歌をどれほど採っているかを調べてみることにする。いくらか前の章の記述と重複する点があるが、それぞれの教科書の特徴を一覧できるようにするため、改めて記しておく。

#### A 東京書籍「国語Ⅰ・Ⅱ」

近代短歌は「国語Ⅰ」には載せず、「国語Ⅱ」の「十 短歌・俳句」の単元に「くれなるの一短歌抄一」と題して、子規・節・晶子・啄木・赤彦・牧水・茂吉・柊二・芳美・修司の10名の短歌を3首ずつ、計30首を掲載する。

茂吉・柊二・芳美・修司の4名の作品12首はいずれも昭和期の作である。

### B 学校図書「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「六 詩・短歌」の単元の「死にたまふ母」と「近代の短歌」の2つの章を設け短歌を扱う。「死にたまふ母」は茂吉の同題の連作59首の中から抜粋して10首を載せる。「近代短歌」の章は、子規・左千夫・赤彦・空穂・晶子・節・白秋・牧水・啄木・遼空の10名の短歌を2首ずつ、計20首を掲載する。

20首のうちで昭和期の作は遼空の1首のみ。

### C 三省堂「新国語Ⅰ・Ⅱ」

近代短歌は「国語Ⅰ」には載せず「国語Ⅱ」の第3の単元の「わたつみの」の章に「近代短歌」と題して、赤彦・晶子・節・八一・茂吉・白秋・牧水・啄木・勇・遼空の10名の短歌を1首ずつ、計10首を掲載する。

掲載する近代短歌の数は合計10首で、高等学校の国語教科書17種の中で最も歌数が少ない。

10首はいずれも明治・大正期の作で、昭和期の作は見当たらない。

### D 教育出版「国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「八 和歌」の単元に「近代短歌」と題して、晶子・啄木・牧水・白秋・節・茂吉の6名の短歌を2首ずつ、計12首を掲載する。国語Ⅱでは「八 和歌と歌論」の単元で、茂吉の歌論「歌を作る覚悟」(3ページ)を載せたあと、同じく茂吉の連作「悲報来」10首をまるごと載せる。

茂吉の短歌を「国語Ⅰ」に2首、「国語Ⅱ」に10首と両方載せるほか、彼の歌論も収載しており、茂吉重視が目立つ。

「国語Ⅰ」に携載された12首のうちで昭和期の作は茂吉の1首のみである。

### E 光村図書「国語Ⅰ・Ⅱ」

近代短歌は「国語Ⅰ」には載せず、「国語Ⅱ」の「十一 短歌・俳句」の単元に「死にたまふ母」と題して茂吉の同題の連作59首の中から抜粋して12首を載せる。

この教科書が取り上げた近代短歌は茂吉の作品12首のみで、ほかの歌人の作はない。

### F 大修館「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「八 短歌」の単元に、やはり「短歌」と題して、子規・左千夫・節・赤彦・茂吉・晶子・白秋・啄木・牧水・遼空・八一の11名の短歌を2首ずつ、計22首を掲載する。

明治・大正期の作品のみで、昭和期のものは見当たらない。

### G 明治書院「基本国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」に近代短歌をそれぞれ15首ずつ、計30首掲載する。

「国語Ⅰ」では「八 詩歌」の単元に「松の葉(短歌十五首)」と題して、子規・晶子・啄木・茂吉・柊二の5名の短歌を3首ずつ、計15首を載せ、「国語Ⅱ」でも同様に「八 詩歌」の単元に「月の出(短歌十五首)」と題して、白秋・牧水・遼空・文明・佐太郎の5名の作を3首ずつ、計15首を載せる。

茂吉・柊二・文明・佐太郎の短歌の中に昭和期の作が合計9首ある。

### H 明治書院「精選国語Ⅰ・Ⅱ」

Gの「基本国語Ⅰ・Ⅱ」と同様に「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」にそれぞれ15首ずつの近代短歌を載せる。「国語Ⅰ」では「六 詩歌」の単元に「藤の花（短歌十五首）」と題して、子規・晶子・啄木・茂吉・柊二の5名の短歌を3首ずつ、計15首を載せ、「国語Ⅱ」でも同様に「六 詩歌」の単元に「春の鳥（短歌十五首）」と題して、白秋・牧水・遼空・文明・佐太郎の作、計15首を載せる。

茂吉・柊二・遼空・文明・佐太郎の短歌の中に昭和期の作が合計10首ある。

#### I 右文書院「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「六 短歌・俳句」の単元に「死にたまふ母」「手套を脱ぐ時」「霧深き朝—新聞歌壇の歌—」の3つの章を設けて近代短歌を扱う。「死にたまふ母」は茂吉の同題の連作59首の中から抜粋して9首を載せ、つづく「手套を脱ぐ時」は啄木の『一握の砂』『悲しき玩具』から、それぞれ2首ずつ、計4首を載せ、最後の「霧深き朝—新聞歌壇の歌—」は「朝日歌壇」の選歌の中から青少年の作品や、青少年とかかわりのある歌を選んで10首を掲げる。

「国語Ⅱ」では「七 歌謡・和歌・俳句」の単元において「潮の遠鳴り」の題で、晶子・白秋・赤彦・遼空・八一・文明・芳美の7名の短歌を3首ずつ、計21首を載せる。芳美の歌3首と文明の1首、それに朝日歌壇の選歌10首の計14首が昭和期の作である。

この教科書は「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」を合わせると43首の短歌を収め、17種の高等学校教科書の中で最もその数が多く、茂吉の連作「死にたまふ母」のほか、朝日歌壇の若い世代の歌を載せるという工夫が見られる。

#### J 筑摩書房「高等学校用国語Ⅰ・Ⅱ」

近代短歌は「国語Ⅰ」には載せず、「国語Ⅱ」の「11 短歌」の単元に「その子二十」・「死にたまふ母」・「無名者の歌」の3つの章を設けて短歌を扱う。「その子二十」は、晶子・啄木・節・牧水・白秋・遼空の6名の短歌を3首ずつ、計18首を載せる。「死にたまふ母」は茂吉の同名の連作59首の中から13首を載せる。ただし、Bの学校図書・Eの光村図書・Iの右文書院の国語教科書も「死にたまふ母」を何首か掲載しているが、いずれも改選版の『赤光』によっているのに対し、この筑摩書房の教科書は初版本の『赤光』によっているので、歌の一部に異同が認められる。「無名者の歌」は近藤芳美の同名の書（昭和49年刊）をもとにした書き下ろしの8ページからなる文章で、朝日歌壇の選者をつとめる芳美が入選歌のうちから若い世代の作品10首を選んで鑑賞したもの。文末には、それとは別に入選歌7首を添える。

「その子二十」の章に収められた18首の短歌の中で、遼空の作品の1首が昭和期の作で、あとはすべて明治・大正期の作である。

#### K 角川書店「高等学校総合国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」にそれぞれ21首ずつの近代短歌を載せる。「国語Ⅰ」では「十一 近代の短歌・俳句」の単元の「冬ごもる—近代短歌—」の章に、子規・左千夫・節・晶子・啄木・牧水・白秋の7名の短歌を3首ずつ、計21首を掲載する。「国語Ⅱ」では「九 近代の短歌・俳句」の単元の「むらぎもの—近代短歌—」の章に、赤彦・茂吉・遼空・佐美雄・たつゑ・柊二・芳美の7名の短歌を3首ずつ、計21首を掲載する。



「国語Ⅰ」では明治・大正期に主として活躍した歌人、「国語Ⅱ」では大正・昭和期に活躍した歌人の作を扱う。「国語Ⅱ」の21首のうち、茂吉の1首と佐美雄・たつゑ・柊二・芳美の歌12首の計13首は昭和期の作である。

#### L 角川書店「高等学校精選国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」にそれぞれ15首ずつの近代短歌を載せる。「国語Ⅰ」では「九 日本の叙情」の単元の「冬ごもる—近代短歌—」の章に、子規・左千夫・晶子・啄木・牧水の5名の短歌を3首ずつ、計15首を載せる。「国語Ⅱ」では「九 近代の叙情」の単元の「木のもとに—近代短歌—」の章に、茂吉・白秋・遼空・修・史の5名の短歌を3首ずつ、計15首を載せる。

「国語Ⅱ」の茂吉の1首と修・史の歌各3首の計7首は昭和期の作である。

#### M 旺文社「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代短歌は「国語Ⅰ」には載せず、「国語Ⅱ」の「3 和歌と短歌」の単元の「近代短歌抄」の章に、晶子・白秋・牧水・啄木・赤彦・茂吉・文明・遼空・芳美・柊二の10名の短歌を2首ずつ、計20首を載せる。その中の遼空の1首と文明・芳美・柊二の各2首、計7首は昭和期の作である。

この教科書は同じ単元に幸綱による「様々の白—短歌を読む楽しみ—」という10ページからなる文章も収める。この文章は、万葉集・古今集の歌とともに、史・茂吉・晶子・かの子・佐美雄・白秋・芳美の歌を鑑賞している。

#### N 尚学図書「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」に近代短歌を15首ずつ載せ、それぞれに短歌の鑑賞文を掲げて鑑賞の手引きとしている。「国語Ⅰ」では「7 短歌と俳句」の単元の「近代の短歌」と「短歌の鑑賞」の2つの章で短歌を扱っている。「近代の短歌」は、晶子・啄木・茂吉・白秋・遼空の5名の短歌を3首ずつ、計15首を載せる。「短歌の鑑賞」は武川忠一による4ページからなる書き下ろしの鑑賞文で、哀果・赤彦・空穂・文明の歌につき鑑賞している。「国語Ⅱ」では「14 短歌と俳句」の単元の「近代の短歌」と「折々のうた」の2つの章で短歌を扱う。「近代の短歌」では、赤彦・夕暮・利玄・文明・章一郎の5名の短歌を3首ずつ、計15首を載せる。「折々のうた」は大岡信の同名の著書（昭55）からの抜粋で、4ページからなり、美代子・節・信綱・晶子・左千夫の短歌を鑑賞している。

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」に載せられた30首の短歌のうちで昭和期の作は文明の2首と章一郎の3首の計5首である。

#### O 尚学図書「高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」とに近代短歌を合計36首載せ、またそれぞれに短歌の鑑賞文を掲げて鑑賞の手引きとしている。「国語Ⅰ」では「九 短歌と俳句」の単元の「近代の短歌」と「短歌の鑑賞」の章で短歌を扱っている。「近代の短歌」は、晶子・啄木・牧水・白秋・茂吉・遼空・柊二の6名の短歌を3首ずつ、計18首載せ、「短歌の鑑賞」は吉野秀雄の『短歌とは何か』（昭51）から抜粋した4ページからなる文章で、左千夫・赤彦・千樫・八一・利玄の歌を鑑賞している。「国語Ⅱ」では「二 短歌と俳句」の単元の「近代の短歌」と「折々のうた」の章で短歌を扱っている。「近代の短歌」は節・茂吉・白秋・八一・芳美の5名の短歌を3首ずつ、計15首を載せる。「折々のうた」は大岡信

の同名の書（昭55）から抜粋した5ページからなる文章で、赤彦・空穂・柴生田稔・鉄幹・左千夫の作品を鑑賞している。

36首の短歌を掲載しているが、これはIの右文書院『高等学校 国語 I・II』の43首、Kの角川書店『高等学校総合国語 I・II』の42首につづいて多い。

42首の短歌のうちで昭和期の作は、遼空・白秋の各1首、茂吉の2首、柊二・芳美の各3首の計10首である。

茂吉と白秋の作品は「国語 I」にも「国語 II」にも3首ずつ載せられている。

#### P 第一学習社「高等学校新国語 I・II」

近代短歌は「国語 I」だけに載せる。「十一 短歌の世界」の単元で、啄木・晶子・茂吉・牧水の4名については3首ずつ、計12首、芳美・隆・史・柊二の4名については1首ずつ、計4首、総計16首を掲載する。そのうちの芳美以下の4名の作4首は昭和期の作である。この單元には、つづいて佐佐木幸綱の『短歌のすすめ』（昭50）から抜粋し加筆した「現代短歌にみる青春」と題する、8ページからなる文章を載せる。これは章一郎・隆・邦雄など6名の歌人の歌を鑑賞している。

#### Q 第一学習社「高等学校国語 I・II」

近代短歌は「国語 I」だけに載せる。「理解編 I」の単元の中にある「その子二十」の章に、晶子・啄木・牧水・赤彦・茂吉・白秋の6名の短歌を3首ずつ、計18首を載せる。茂吉と白秋の短歌に昭和期の作が1首ずつ、計2首ある。

以上、17種類の教科書について、それぞれ近代短歌の単元の構成について概観し、歌人別の収録短歌数、その中の昭和期に制作された短歌の数、鑑賞文・歌論等のある場合はその筆者など、それぞれの教科書の特色について見てきた。

その調査をもとにして、各教科書がどの歌人の作品を何首教材として取り上げているかを示したものが〔表4〕である。

この〔表4〕についてすこし説明を加えておくと、右文書院の「高等学校国語 I」は既に触れたように「霧深き朝—新聞歌壇の歌—」という題で、朝日歌壇の入選歌10首を載せている。10名の作者がいるわけであるが、紙面の都合により、専門歌人でないという点も考慮して、作者の氏名を掲げるとは省略して便宜的に「朝日歌壇」と一括して示した。

また、〔表4〕では「国語 I」・「国語 II」のどちらに収載しているかは原則として区別せずに表に示しているが、教科書の中には同一の歌人の作品を「国語 I」と「国語 II」の2回にわたって載せているものがある。すなわち、Dの教育出版の場合・斎藤茂吉の短歌を「国語 I」で2首、「国語 II」では10首載せているので、2度載せていることを示すために、 $\frac{2}{10}>$ のように示した。また、Nの尚学図書「高等学校国語」は、そのIとIIに斎藤茂吉と北原白秋の短歌をそれぞれ3首ずつ載せているので、それを $\frac{3}{3}>$ のように示した。

また、〔表4〕の上欄の歌人名の配列は、歌の掲載回数の多い者を左、少ない者を右にして、順に並べた。



このように、歌人ごとに歌の掲載回数を集計してみた結果、その回数の最も多いのは斎藤茂吉で延べ91回、17種類ある教科書のすべてに作品が載せられていることがわかった。これに続くのが石川啄木（44回）、与謝野晶子（43回）、北原白秋（39回）、若山牧水（39回）といった歌人で、これらの歌人の作品も、ほとんどの教科書に載せられているが、茂吉の回数に比べると半分にも満たない。

斎藤茂吉の作品が他の歌人を圧して多く掲載されているのは、ひとつの理由として、10首とか13首とかまとめて連作の形で掲載されていることが関係している。茂吉の連作「死にたまふ母」59首の中から抜粋して教材とする教科書には、学校図書（10首）、光村図書（12首）、右文書院（8首）、筑摩書房（13首）の4種がある。このうち、光村図書の教科書の場合は、「国語Ⅰ」には近代短歌の単元がなく、「国語Ⅱ」で扱うのであるが、この教科書の近代短歌教材は、「死にたまふ母」の連作12首だけで、他の歌人の作品は一切収めていない点が注目される。なお、Dの教育出版の「国語Ⅱ」が、茂吉が師事した伊藤左千夫の死の衝撃を歌った連作「悲報来」10首をまるごと掲載しているのも目をひく。

3種類以上の教科書に作品が掲載された歌人は全部で14人にのぼるが、そのうちで主として昭和期に活躍した歌人は宮柊二・近藤芳美・土屋文明の3名である。いずれかの教科書に1首でも歌の載った歌人ということに基準をゆるめると、佐藤佐太郎・斎藤史・寺山修司・前川佐美雄・生方たつゑ・木俣修・窪田章一郎・岡井隆の名があがってくるが、佐藤佐太郎・斎藤史の2人の作品が2つの教科書に載っているほかは、みな1回かぎり、まだ評価が定まるといえるところまでいっていないと判断される。

次に、こんどは、歌人別にどの作品がどの教科書に載せられているかの調査結果を表にしてみることにする。この〔表5〕によって、その作品が、どの教科書に掲載されているかを知ることができると同時に、何度教科書に採られたかを知って、その歌に対する評価もうかがうことができる。

なお、歌人の配列は、教科書に掲載された短歌の数の多い順とし、歌の数が同じときは、それらの歌が教科書に掲載された回数の合計の多い順とする。

また、それぞれの歌人の名のあとに、括弧でくくって、掲載されたその歌人の歌の総数と、それらの歌が何度教科書に載せられたか、延べ掲載回数を「斎藤茂吉（40首・91回）」というように示す。そして、掲載された教科書の書名は、121ページの〔表Ⅰ〕「『国語Ⅰ』・『国語Ⅱ』教科書一覧」の「教科書の略称」欄に示した漢字2字よりなる略称で表示し、「国語Ⅰ」は1、「国語Ⅱ」は2と示す。

たとえば伊藤左千夫の「牛飼が歌よむ時に……に」の歌の表記を各教科書で見ると

大 修 館「高等学校国語Ⅰ」……<sup>うしかひ</sup>牛飼が<sup>よ</sup>歌よむ時に世のなかのあらたしき歌大いに<sup>おこ</sup>起る

角川書店「高等学校総合国語Ⅰ」……<sup>うしかひ</sup>牛飼が歌よむ時に世のなかの<sup>あらた</sup>新しき歌大いにおこる

のように教科書によって違いが見られる。このように教科書によって、漢字・送り仮名・ふりがな等の表記に違いが見られることがあるが、この表では掲載教科書の欄の最初（いちばん左）に示した教科書の表記に従うことにする。

なお、右文書院の「高等学校国語Ⅰ」に掲載された朝日歌壇の入選歌10首については、便宜的に作者別に表を作らず、「朝日歌壇」として10首を一括して掲げ、それぞれの短歌のあとに作者名を記すことにする。

〔表5〕 歌人別掲載短歌一覧表

斎藤茂吉 (40首・91回)

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり	学図1 教出1 光村2 大修1 明基1 明精1 右文1 筑摩2 角総2 旺文2 尚学1 尚新1 一新1 第一1	14
2	最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも	東書2 教出1 明基1 明精1 角総2 角精2 尚学1 尚新1	8
3	死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる	学図1 光村2 右文1 筑摩2 旺文2 一新1	6
4	桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり	学図1 光村2 右文1 筑摩2	4
5	みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる ……………みんとぞいそぐなりけれ	学図1 光村2 右文1 筑摩2	4
6	陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ	東書2 大修1 尚新2	3
7	我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ	学図1 右文1 筑摩2	3
8	星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母は燃えゆきにけり	学図1 筑摩2 一新1	3
9	灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり	学図1 光村2 筑摩2	3
10	あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり	三省2 角総2 角精2	3
11	はるばると葉をもちて来しわれを目守りたまへりわれは子なれば	光村2 右文1 筑摩2	3
12	母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲しもよ蚕のねむり	右文1 筑摩2 一新1	3
13	沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ	東書2 第一1	2
14	吾妻やまに雪かがやけばみちのくの我が母の国に汽車入りにけり	光村2 筑摩2	2
15	わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし	光村2 筑摩2	2
16	はふり火を守りこよひは更けにけり今夜の天のいつくしきかも	光村2 筑摩2	2
17	どくだみも薊の花も焼けるたり人葬所の天明けぬれば	光村2 筑摩2	2
18	朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし竝みよろふ山	尚学1 尚新1	2
19	燈あかき都をいでてゆく姿かりそめの旅と人見るらんか	学図1	1
20	朝さむみ桑の木の葉に霜ふりて母にちかづく汽車走るなり	学図1	1
21	寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何かいひたまふわれは子なれば	学図1	1
22	ひた走るわが道暗ししんしんと暁へかねたるわが道くらし	教出2	1
23	すべなきか蛍をころす手のひらに光つふれてせんすべはなし	教出2	1
24	ほのぼのとのおのれ光りてながれたる蛍を殺すわが道くらし	教出2	1
25	氷室より氷をいだし居る人はわが走る時ものを云はざりしかも	教出2	1

26	氷 <small>くち</small> きるをとこの口のたばこの火赤かりければ見て走りたり	教出2	1
27	死にせれば人は居ぬかなと嘆かひて眠り葉をのみて寝んとす	教出2	1
28	赤彦と赤彦が妻 <small>あ</small> 吾 <small>のみ</small> に寝よと蚤 <small>こな</small> とり粉 <small>く</small> を呉れにけらずや	教出2	1
29	罌粟 <small>けし</small> はたの向 <small>むか</small> うに湖 <small>うみ</small> の光りたる信濃のくにに目ざめけるかも	教出2	1
30	諏訪 <small>とほじろ</small> のうみに遠 <small>ながれ</small> 白く立つ流波 <small>なみ</small> つばらつばらに見んと思へや	教出2	1
31	あかあかと朝焼けにけりひんがしの山 <small>やま</small> 並 <small>なみ</small> の空朝焼けにけり	教出2	1
32	いのちある人あつまりて我が母のいのち死 <small>し</small> 行 <small>ゆ</small> くを見たり死ゆくを	光村2	1
33	火のやまの麓 <small>ふもと</small> にいつる酸 <small>すい</small> の湯 <small>ゆ</small> に一夜ひたりてかなしみにけり	光村2	1
34	しづかなる峠 <small>とこ</small> をのぼり来しときに月のひかりは八谷 <small>やたに</small> をてらす	明基1	1
35	しんしんと雪ふるなかにたたずめる馬の眼はまたたきにけり	明精1	1
36	死に近き母が額 <small>かほ</small> を撫 <small>な</small> りつつ涙 <small>なみ</small> ながれて居たりけるかな	右文1	1
37	木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちにけり	角精2	1
38	草づたふ朝の蛍 <small>せみ</small> よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ	尚新2	1
39	最上川 <small>もがみ</small> の上空にして残れるはいまだうつくしき虹 <small>にじ</small> の断片	尚新2	1
40	この心 <small>こころ</small> 葬 <small>くわ</small> り果てんと秀 <small>ひで</small> の光 <small>あかり</small> る錐 <small>いし</small> を畳 <small>たたみ</small> に刺しにけるかも	第一1	1

## 石川啄木 (23首・44回)

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあひだより落つ	東書2 学図1 三省2 角総1 角精1 旺文2	6
2	不 <small>こず</small> 来方のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心	大修1 角総1 角精1 尚学1 尚新1 一新1	6
3	やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに	明精1 旺文2 尚学1 尚新1	4
4	新しき明日 <small>あした</small> の来るを信ずといふ／自分の言葉に／嘘はなけれど一	東書2 角総1 角精1	3
5	はたらけど／はたらけど猶 <small>なほ</small> わが生活 <small>くらし</small> 楽にならざり／じつと手を見る	明基1 尚学1 尚新1	3
6	病のごと／思郷のころ湧く日なり／目にあをぞらの煙かなしも	東書2 筑摩2	2
7	手 <small>て</small> 套 <small>わ</small> を脱ぐ手ふと休む／何やらむ／ころかすめし思ひ出のあり	明基1 右文1	2
8	猫を飼はば／その猫がまた争ひの種となるらむ／かなしき我が家	明基1 明精1	2
9	友がみなわれよりえらく見ゆる日よ／花を買ひ来て／妻としたしむ	一新1 第一1	2
10	ふるさとの訛 <small>なまり</small> なつかし／停車場 <small>ていしやば</small> の人ごみの中に／そを聴きにゆく	学図1	1
11	いたく錆びしピストル出でぬ／砂山の／砂を指もて握りてありしに	教出1	1
12	何となく明日はよき事あるごとく／思ふ心を／吐りて眠る	教出1	1
13	しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路 <small>くしろ</small> の海の冬の月かな	大修1	1

14	人がみな／同じ方角に向いて行く／それを横より見てゐる心	明精 1	1
15	そことなく／密柑 <small>みかん</small> の皮の焼くるときにほひ残りて／夕べとなりぬ	右文 1	1
16	人気 <small>ひとげ</small> なき夜の事務室に／けたたましく／電話の鈴 <small>りん</small> の鳴りて止みたり	右文 1	1
17	秋近し！／電燈の球のぬくもりの／さはれば指の皮膚に親しき	右文 1	1
18	頬 <small>ほ</small> につたふ／なみだのごはず／一握の砂を示しし人を忘れず	筑摩 2	1
19	ダイナモンの／重き唸りのこちよさよ／あはれこのごとく物を言はまし	筑摩 2	1
20	怒 <small>いか</small> る時／かならずひとつ鉢 <small>はち</small> を割り／九百九十九割りて死なまし	一新 1	1
21	目を閉じて／傷心 <small>しやうしん</small> の句を誦してゐし／友の手紙のおどけ悲しも	一新 1	1
22	たはむれに母を背負ひて／そのあまり軽 <small>かる</small> きに泣きて／三步あゆまず	第一 1	1
23	みぞれ降る／石狩 <small>いしかり</small> の野の汽車に読みし／ツルゲエネフの物語かな	第一 1	1

與謝野晶子（13首・43回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	その子 <small>はたちくし</small> 二十櫛 <small>はち</small> にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな	東書 2 学図 1 教出 1 大修 1 明精 1 筑摩 2 角総 1 旺文 2 尚学 1 尚新 1 一新 1 第一 1	12
2	なにとなく君に待たるるこちして出でし花野の夕月夜かな	学図 1 教出 1 大修 1 右文 2 筑摩 2 角総 2 角精 2 旺文 2 尚学 1 一新 1	10
3	清水 <small>きよみづ</small> へ祇園 <small>ぎごん</small> をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき	東書 2 明基 1 右文 2 尚新 1	4
4	海恋し潮の遠鳴りかぞへては少女 <small>をとめ</small> となりし父母の家	明基 1 右文 2 角精 1 尚学 1	4
5	夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳吹かれけり	角総 1 角精 1 尚新 1	3
6	ああ皐月 <small>さつき</small> 仏蘭西の野は火の色す君も雛罌粟 <small>コクリコ</small> われも雛罌粟	明基 1 明精 1	2
7	やは肌のあつき血汐 <small>ちしやうじゆえい</small> に触れも見でさびしからずや道を説く君	一新 1 第一 1	2
8	ほととぎす治承寿永のおん国母 <small>こくも</small> 三十にして経よます寺	東書 2	1
9	髪五尺ときなば水にやはらかき少女 <small>をとめ</small> ごころは秘めてはなたじ	三省 2	1
10	春曙抄 <small>しゆんじよせう</small> に伊勢 <small>いせ</small> をかさねてかさ足らぬ枕 <small>まくら</small> はやがてくづれるかな	明精 1	1
11	金色 <small>こんじき</small> のちひさき鳥のかたちして銀杏 <small>いてふ</small> ちるなり夕日の岡 <small>をか</small> に	筑摩 2	1
12	うながされ汀 <small>みぎは</small> の闇 <small>やみ</small> に車おりぬほのむらさきの反橋 <small>ふち</small> の藤	一新 1	1
13	鎌倉 <small>かまくら</small> や御仏 <small>みほとけ</small> なれど釈迦 <small>しやかむに</small> 牟尼は美男におはず夏木立かな	第一 1	1

## 北原白秋 (17首・39回)

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の <sup>と</sup> 面の <sup>も</sup> 草に日の入る夕べ	学図1 教出1 大修1 明精1 右文2 筑摩2 角総1 角精2 尚学1 尚新1	10
2	昼ながら <sup>かす</sup> 幽かに光る <sup>まうそう</sup> 螢一つ <sup>やぶ</sup> 孟宗の <sup>い</sup> 藪を出でて消えたり	明精2 角総1 尚学1 尚新1 第一1	5
3	草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり	教出1 角精2 旺文2	3
4	<sup>うすひね</sup> 碓氷嶺の南おもてとなり <sup>に</sup> けりくだりつつ思ふ春のふかきを	明基2 尚学1 尚新1	3
5	どくだみの花の <sup>に</sup> ほひを思ふとき青みて迫る君がまなざし	三省2 角総1	2
6	かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふ人の春のまなざし	大修1 旺文2	2
7	寂しさに海を <sup>のぞ</sup> 覗けばあはれあはれ <sup>たこ</sup> 章魚逃げてゆく真昼の光	明基2 明精2	2
8	病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし <sup>ぼた</sup> 畑の黄なる月の出	明基2 尚新2	2
9	照る月の <sup>ひえ</sup> 冷さだかなるあかり戸に <sup>め</sup> 眼は凝らしつつ <sup>し</sup> 盲ひてゆくなり	尚新2 第一1	2
10	手にとれば <sup>かり</sup> 桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ	学図1	1
11	<sup>ふとねぎ</sup> 太葱の一茎ごと <sup>とんぼ</sup> に蜻蛉みてなにか恐るるあかき夕暮れ	右文2	1
12	<sup>いしがけ</sup> 石崖に子ども七人腰かけて <sup>ふく</sup> 河豚を釣 <sup>を</sup> り居り夕焼け小焼け	右文2	1
13	いっしかに春の名残となり <sup>に</sup> けり昆布干し場のたんぼぼの花	筑摩2	1
14	<sup>みじかび</sup> 短日の光つめたき <sup>ささ</sup> 笹の葉に雨さみさると降りて来にけり	筑摩2	1
15	しみじみと物のあはれを知るほどの <sup>をとめ</sup> 少女となりし君とわかれぬ	角精2	1
16	飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて <sup>を</sup> 見居りその揺るる枝を	尚新2	1
17	君かへす朝の <sup>しきいし</sup> 舗石さくさくと雪よ <sup>りんご</sup> 林檎の香のごとくふれ	第一1	1

## 若山牧水 (13首・37回)

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	<sup>しらとり</sup> 白鳥は <sup>かな</sup> 哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ	学図1 大修1 明基2 明精2 角総1 角精1 尚新1 第一1	8
2	幾山河越えさりゆかば寂しさの <sup>は</sup> 終てなむ国ぞ今日も旅ゆく	学図1 大修1 筑摩2 角精1 尚新1 一新1 第一1	7
3	<sup>うなそこ</sup> 海底に <sup>め</sup> 眼のなき魚の <sup>す</sup> 棲むといふ <sup>め</sup> 眼の無き魚の恋しかりけり	東書2 三省2 筑摩2 角総1 角精1	5
4	かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな	教出1 明基2 旺文2 一新1	4
5	<sup>はるまひる</sup> 春白昼この港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり	東書2 教出1 筑摩2	3



6	<sup>われもかう</sup> 吾木香すすきかるかや秋くさのさびしききはみ君におくらむ	東書2 明精2	2
7	うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花	明基2 尚新1	2
8	瀬々走るやまめうぐひのうろくづの美しき頃 <sup>ころ</sup> の山ざくら花	明精2	1
9	多摩川の砂にたんぼぼ咲くころはわれにもおもふ人のあれかし	角総1	1
10	いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや	旺文2	1
11	<sup>ぼうきやく</sup> 忘却のかけかさびしきいちにんの人あり旅をながれ渡れる	一新1	1
12	旅人のからだもいつか海となり五月の雨が降るよ港に	一新1	1
13	海鳥の風にさからふ一ならび一羽くづれてみなくづれたり	第一1	1

积迢空 (14首・31回)

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	<sup>くず</sup> 葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり	学図1 大修1 明基2 明精2 右文2 筑摩2 角総2 旺文2 尚学1 尚新1	10
2	<sup>むら</sup> 邑山の松の木むらに、日はあたり ひそけきかもよ。旅人の墓	大修1 明基2 筑摩2 尚学1	4
3	たゝかひに果てにし子ゆゑ、身に泌 <sup>し</sup> みて ことしの桜 あはれ 散りゆく	学図1 筑摩2 旺文2	3
4	人も 馬も 道ゆきつかれ死ににけり。旅寝かさなるほどの かそけさ	三省2 明精2	2
5	<sup>からざけ</sup> 乾鮭のさがり しみみに暗き軒。銭よみわたし、大みそかなる	角総2 角精2	2
6	歳深き山の／かそけさ。／人をりて、まれにもの言ふ／声きこえつつ	角総2 角精2	2
7	船べりに浮きて息づく <sup>あま</sup> 蟹が子の青き腫 <sup>ひとみ</sup> は、われを見にけり	明基2	1
8	たたかひは永久 <sup>とこ</sup> にやみぬと たたかひに亡 <sup>う</sup> せし子に告げ すべあらめやも	明基2	1
9	たびごころもろくなり来ぬ。志摩 <sup>しま</sup> のはて 安乗 <sup>あのり</sup> の崎に、灯の明かり見ゆ	右文2	1
10	青山に、夕日片照るさびしさや 入り江の町のまざまざと見ゆ	右文2	1
11	みつまたの花は咲きしか。静かなるゆふべに出 <sup>い</sup> でて 処女 <sup>をとめ</sup> らは見よ	角精2	1
12	<sup>ねむ</sup> 合歡の葉の深きねむりは見えねども、うつそみ愛 <sup>を</sup> しき その香たち来も	尚学1	1
13	山びとの 言ひ行くことのかそけさよ。きその夜、 <sup>しか</sup> 鹿の峰をわたりし	尚新1	1

14	<sup>かややま</sup> 萱山に 炭がまひとつ残り居て、この宿主は 戦ひに死す	尚新 1	1
----	--	------	---

## 島木赤彦（12首・22回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ	東書 2 大修 1 右文 2 角総 2 旺文 2 第一 1	6
2	<sup>しののち</sup> 信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ	東書 2 右文 2 旺文 2	3
3	夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ	学図 1 大修 1 尚学 2	3
4	隣室に書よむ子らの声きけば心に泌みて生きたかりけり	尚学 2 第一 1	2
5	我が家の犬はいづくにゆきぬらむ今宵も思ひいでて眠れる	東書 2	1
6	人に告ぐる悲しみならず秋草に息を白々とつきにけるかも	学図 1	1
7	わたつみの空わたる日の沈むまで一つの船にあふこともなし	三省 2	1
8	<sup>つばき かげ</sup> 椿の蔭をんな音なく来りけり白き布団を乾しにけるかも	右文 2	1
9	むらぎもの心しづまりて聞くものかわれの子どもの息終はるおとを	角総 2	1
10	<sup>つぐみ</sup> 鶴来てそよごの雪を散らしけり心に触るものの静けさ	角総 2	1
11	<sup>たかつき</sup> 高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも	尚学 2	1
12	ひたぶるに我を見たまふみ顔より涎を垂らし給ふ尊さ	第一 1	1

## 正岡子規（7首・19回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	くれなるの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる	東書 2 学図 1 大修 1 明精 1 角総 1 角精 1	6
2	<sup>かめ</sup> 瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり	東書 2 明精 1 角総 1 角精 1	4
3	いちはつの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春ゆかんとす	学図 1 大修 1 明基 1 明精 1	4
4	冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ	角総 1 角精 1	2
5	若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり	東書 2	1
6	松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く	明基 1	1
7	くれなるの梅散るなべに故郷につくしつみにし春し思ほゆ	明基 1	1

長塚 節 (6首・19回)

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	馬追虫の髭のそよりに来る秋はまなこを閉じて想ひみるべし	学図1 三省2 教出1 大修1 筑摩2 角総2 尚新2	7
2	垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども	東書2 学図1 大修1 筑摩2 尚新2	5
3	芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつつあらむ	東書2 教出1 角総1	3
4	白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり	筑摩2 尚新2	2
5	白銀の鍼打つごととききりぎりす幾夜をへなば涼しかるらむ	東書2	1
6	日に干せば日向臭しと母のいひし衾はうれし軟らかにして	角総1	1

宮 柁二 (14首・18回)

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり	東書2 明基1 明精1 旺文2	4
2	山に入りて樹々のあはひにみちみてる冬のひかりの渦巻くを見たり	角総2 尚新1	2
3	むらさきの通草の花の散る谷に山鳩のこゑ二つきこゆる	東書2	1
4	七階に空ゆく雁のこゑきこえこころしづまる吾が生あはれ	東書2	1
5	懐へたるをさな子の顔ひきしまり叱る母をば喰ひ入るごと見入る	明基1	1
6	悲しみを窺ふごとも青銅色のかなぶん一つ夜半に来てをり	明基1	1
7	日蔭より日の照る方に群鶏の数多き脚步みてゆくも	明精1	1
8	おそらくは知らるるなけむ一兵の生きの有様をまつぶさに遂げむ	明精1	1
9	毎日の勤務のなかのをりふしに呆然とをるをわが秘密とす	角総2	1
10	さまざまに見る夢ありてそのひとつ馬の蹄を洗ひやりるき	角総2	1
11	英雄で吾ら無きゆゑ暗くとも苦しくとも堪へて今日に従ふ	旺文2	1
12	つき放されし貨車が夕光に走りつつ寂しきまでにとどまらずけり	尚新1	1
13	蠟燭の長き炎のかがやきて揺れたるごととき若き代過ぎぬ	尚新1	1
14	相揉める車中に誰か差し上げし大輪の菊苅えつつ青む	一新2	1

近藤芳美 (9首・15回)

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	たちまちに君の姿を霧とざし或る楽章をわれは思ひき	東書2 右文2 角総2 旺文2 尚新2	5

2	壊れたる <sup>さく</sup> 柵を入り来て清き雪靴下ぬれて <sup>なれ</sup> 汝は従ふ	右文 2 旺文 2	2
3	傍観を良心として生きし日々青春と呼ぶときもなかりき	角総 2 尚新 2	2
4	手を垂れてキスを待ち居し表情の幼きを恋ひ別れ来りぬ	東書 2	1
5	絶えずして人らささやき合ふ <sup>ごと</sup> 如き長き戦ひの日に生きて来ぬ	東書 2	1
6	生きて行くは楽しと歌ひ去りながら幕下りたれば湧く涙かも	右文 2	1
7	かなしきまでに寄り来る心負ひ目とし <sup>ひとよ</sup> 生きむ一生とまた思ふとき	角総 2	1
8	果てしなき <sup>かなた</sup> 彼方に向かひて手旗うつ万葉集をうち止 <sup>や</sup> まぬかも	尚新 2	1
9	世をあげし思想の中にまもり来て今こそ戦争を憎む心よ	一新 1	1

## 土屋文明（10首・14回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	小工場 <sup>せうこうちやう</sup> に酸素 <sup>ようせつ</sup> 溶接のひらめき立ち砂町 <sup>すなまち</sup> 四十町夜ならむとす	明基 2 旺文 2	2
2	その石に君もしばらく <sup>すわ</sup> 坐りたまへその小さきは <sup>ふき</sup> 露の若萌 <sup>わかもえ</sup>	明基 2 明精 2	2
3	この谷 <sup>いく</sup> や幾代 <sup>よ</sup> の飢に <sup>うま</sup> 瘦せ <sup>や</sup> 瘦せて道に小なる <sup>おうな</sup> 媼行かしむ	明精 2 旺文 2	2
4	夕べ食すはうれん草 <sup>くく</sup> は茎 <sup>さび</sup> 立てり淋しさを遠くつげてやらまし	右文 2 尚学 2	2
5	ただひとり <sup>われ</sup> 吾より貧しき友なりき金のことに <sup>まじはり</sup> て交絶てり	明基 2	1
6	休暇となり帰らずに居る下宿部屋思はぬところに夕影のさす	明精 2	1
7	この三朝 <sup>みあさ</sup> あさなあさなをよそほひし <sup>すいれん</sup> 睡蓮の花今朝はひらかず	右文 2	1
8	ふるさとの盆 <sup>こよひ</sup> も今夜はすみぬらむあはれ様々に人は過ぎにし	右文 2	1
9	一生 <sup>ひとよ</sup> の喜びに中学に入りし日よ其の時の靴屋あり <sup>われ</sup> 吾は立ち止る <sup>どま</sup>	尚学 2	1
10	山も川もうつるといへど言葉あり千年を結ぶ言葉をぞ思ふ	尚学 2	1

## 伊藤左千夫（5首・10回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	おり立ちて今朝 <sup>けさ</sup> の寒さを驚きぬ露しとしとと柿 <sup>かき</sup> の落ち葉深く	学図 1 大修 1 角精 1	3
2	牛飼 <sup>うしかひ</sup> が歌 <sup>よ</sup> 詠む時に世のなかのあらたしき歌大いに <sup>おこ</sup> 起る	大修 1 角総 1 角精 1	3
3	今朝の朝の露ひやびやと秋草やすべて <sup>かそ</sup> 幽けき <sup>ほろび</sup> 寂滅の光	学図 1 角総 1	2
4	さびしさの極みに堪へて天地に寄する命をつくづくと思ふ	角総 1	1
5	よき日には庭にゆさぶり雨の日は家とよもして <sup>こら</sup> 児等が遊ぶも	角精 1	1

会津八一（7首・9回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	あめつちに われ ひとり ゐて たつ ごとき この さびし さを きみ は ほほゑむ	大修1 右文2	3
2	おほてらのまろきはしらの月かけをつちにふみつつものをこそおも へ	右文2 尚新2	4
3	くわんおん の しろき ひたひ に やうらく の かけ うご かして かぜ わたる みゆ	三省2	1
4	するえん の あまつ をとめ が ころもで の ひま に も すめる あき の そら かな	大修1	1
5	かすが野に押してるつきのほがらかにあきのゆふべとなりけるか も	右文2	1
6	ほほゑみて うつつごころ に あり たたす くだらぼとけ に しく ものぞ なき（奈良博物館にて）	尚新2	1
7	ならざかの いし の ほとけ の おとがひ に こさめ な がるる はる は き に けり（奈良坂にて）	尚新2	1

佐藤佐太郎（5首・6回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	戦 <sup>たたかひ</sup> はそこにあるかとおもふまで悲し曇 <sup>くもり</sup> のはての夕焼 <sup>ゆふやけ</sup>	明基2 明精2	2
2	窓そとに日に輝きてとべるものわが部屋 <sup>つち</sup> に入れば土 <sup>てふ</sup> いろの蝶	明基2	1
3	白藤 <sup>しろふぢ</sup> の花にむらがる蜂 <sup>はち</sup> の音あゆみさかりてその音はなし	明基2	1
4	薄明のわが意識にてきこえる青杉を焚く音とおもひき	明精2	1
5	憂なくわが日々はあれ紅梅の花すぎてよりふたたび冬木	明精2	1

斎藤 史（4首・4回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	しなやかな若いけものを駈 <sup>きよ</sup> しゆけり蹄 <sup>ひづめ</sup> にかかり花は散るもの	角精2	1
2	濁流だ濁流だと叫び流れゆく末は泥土か夜明けか知らぬ	角精2	1
3	白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されたれば眼を開き居り	角精2	1
4	廃軌道に残るとんねるの口暗し 夜夜そこを出て我に来る汽車	一新1	1

## 寺山修司（3首・3回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや	東書2	1
2	寝にもどるのみのわが部屋生くる蠅 <sup>はへ</sup> つけて蠅取紙ぶらさがる	東書2	1
3	すでに亡き父への葉書一枚もち冬田を越えて来し郵便夫	東書2	1

## 前川佐美雄（3首・3回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	ぞろぞろと鳥けだものをひきつれて秋晴れの街にあそび行きたし	角総2	1
2	六月のある日のあさの嵐 <sup>あらし</sup> なりレモンしぼれば露あをく垂る	角総2	1
3	葛城 <sup>かつらぎ</sup> の夕日にむきて臥 <sup>ふ</sup> すごときむかしの墓はこゑ絶えてある	角総2	1

## 生方たつゑ（3首・3回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	雪山に雪のかげろふ炎 <sup>も</sup> えてゐて人のにはほひも遠きやすらぎ	角総2	1
2	北を指すものらよなべてかなしきにわれは狂はぬ磁石をもてり	角総2	1
3	いのち噴 <sup>とき</sup> く季の木ぐさのささやきをききてねむり合ふ野の仏たち	角総2	1

## 木俣 修（3首・3回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	幼 <sup>め</sup> らの眼のごとき星かぎりなくかがやきて雪の止 <sup>や</sup> みし夜の空	角精2	1
2	不用意のわが言葉ひとつとりどりに利用されたる果ても見て来ぬ	角精2	1
3	孤独なるひとときならん少年の枯れ芝の上に倒立のさま	角精2	1

## 前田夕暮（3首・3回）

番号	短 歌	掲載教科書	掲載回数
1	雪のうへに空がうつりてうす青しわが悲しみぞしづかに燃ゆなる	尚学2	1
2	向日葵 <sup>ひまわり</sup> は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちひささよ	尚学2	1
3	洪水川 <sup>てみづかは</sup> あからにごりてながれたり地 <sup>つち</sup> より虹 <sup>にじ</sup> の湧 <sup>わ</sup> き立ちにけり	尚学2	1

木下利玄（3首・3回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	夕方に子供の遊ぶころとなり町にも下る青きうす靄 <small>もや</small>	尚学2	1
2	牡丹花 <small>ぼたん</small> は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ	尚学2	1
3	曼珠沙華 <small>まんじゆしやげ</small> 一むら燃えて秋陽 <small>あきび</small> つよしそこ過ぎてゐるしづかなる径 <small>みち</small>	尚学2	1

窪田章一郎（3首・3回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	ちかちかと夜空の雲にこもりたる巷 <small>ちまた</small> のひびき春ならむとす	尚学2	1
2	灯を消して寝につく子らに声をかくわれも父よりされしごとくに	尚学2	1
3	猫じやらし昼顔の花かやつり草 <small>なたづ</small> 仔み見けむ唐土の空海 (陕西省青竜寺遺址)	尚学2	1

窪田空穂（2首・2回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	鉦 <small>かね</small> 鳴らし信濃 <small>しなの</small> の国を行き行かばありしながらの母見るらむか	学図1	1
2	槍 <small>やり</small> が岳 <small>だけ</small> そのいただきの岩にすがり天の真中 <small>まなか</small> に立ちたり我は	学図1	1

吉井 勇（1首・1回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	かのよひの露台のことはゆめ人に語りたまふなと言へる君かな	三省2	1

朝日歌壇入選歌（10人・10首・各1回）

番号	短歌	掲載教科書	掲載回数
1	花も土 <small>にお</small> も匂うばかりの坂に来て母のあゆみに呼吸をあわす (成瀬 幸平)	右文1	1
2	花冷えの雨降る中をパンを焼く匂い漂う露地帰りくる (今田 卓三)	右文1	1
3	激戦の日を命日とせる兄の六月十四日泰山木咲けり (西川 光枝)	右文1	1

4	無雑作に鉢が一つ裁台 <small>たちだい</small> に置かれてわびし夜の仕事場 (木佐貫泰輔)	右文1	1
5	どこかにて雨に遭いたる貨物車が街の灯浴びて踏切を過ぐ (石山千果夫)	右文1	1
6	かなしみを天になげうちはればれとブランコふみぬ風きりてふむ (金田千恵子)	右文1	1
7	鉄管の冷たさ増しし秋深く手袋二枚重ね働く (佐藤則夫)	右文1	1
8	霧深き朝を濡るるまで遠く来て髪を拭き合う教室の児等 (泉田タミ子)	右文1	1
9	鮮魚の香立てて行商群れくだる夜明けの門司 <small>もじ</small> の駅の明るさ (山岡雅吉)	右文1	1
10	君をふと大人に見せて冬の陽は校舎の影にはや沈みたり (入江君子)	右文1	1

以上、歌人ごとにそれぞれの短歌がどの教科書に採られているかを見てきたが、それによって何度教科書に採られているかも判明した。それで、掲載された回数の多い順に短歌を示すと下の〔表6〕のようになる。紙面の関係から、掲載回数が3回以上のものだけをここに示すこととする。

〔表6〕 短歌別掲載回数

掲載回数	短歌	作者
14	のど赤き玄鳥 <small>つばくらめ</small> ふたつ屋梁 <small>はり</small> にゐて足乳根 <small>たらちね</small> の母は死にたまふなり	斎藤茂吉
12	その子二十櫛 <small>はたちくし</small> にながるる黒髪のおごりほ春のうつくしきかな	与謝野晶子
10	なにとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな	与謝野晶子
〃	春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面 <small>おも</small> の草に日の入る夕べ	北原白秋
〃	葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり	釈 迢 空
8	最上川逆白波 <small>もがらがはさかしらなみ</small> のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも	斎藤茂吉
〃	白鳥 <small>しらとり</small> は哀 <small>かな</small> しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ	若山牧水
7	幾山河越えさりゆかば寂しさの終 <small>は</small> てなむ国ぞ今日も旅ゆく	若山牧水
〃	馬追虫 <small>うまおひ</small> の髭 <small>ひげ</small> のそよりに来る秋はまなこを閉 <small>お</small> めて想 <small>おも</small> ひみるべし	長塚 節
6	死に近き母 <small>そひね</small> に添寝のしんしんと遠田 <small>とほだ</small> のかはづ天に聞こゆる	斎藤茂吉
〃	いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあひだより落つ	石川啄木
〃	不來方 <small>こずかた</small> のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心	石川啄木
〃	みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ	島 木 赤 彦



6	くれなるの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる	正岡子規
5	昼ながら幽かに光る蛍一つ孟宗の藪を出でて消えたり	北原白秋
〃	海底に眼のなき魚の棲むといふ眼のなき魚の恋しかりけり	若山牧水
〃	垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども	長塚節
〃	たちまちに君の姿を霧とぞし或る楽章をわれは思ひき	近藤芳美
4	桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり	斎藤茂吉
〃	みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる	斎藤茂吉
〃	やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに	石川啄木
〃	清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき	与謝野晶子
〃	海恋し潮の遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家	与謝野晶子
〃	かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな	若山牧水
〃	邑山の松の木むらに、日はあたりひそけきかもよ。旅人の墓	釈迢空
〃	瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり	正岡子規
〃	いちはつの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春ゆかんとす	正岡子規
〃	あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり	宮柊二
3	陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ	斎藤茂吉
〃	我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まれ乳足らひし母よ	斎藤茂吉
〃	星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母は燃えゆきにけり	斎藤茂吉
〃	灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるが中に母をひろへり	斎藤茂吉
〃	あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり	斎藤茂吉
〃	はるばると葉をもちて来しわれを目守りたまへりわれは子なれば	斎藤茂吉
〃	母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲しもよ蚕のねむり	斎藤茂吉
〃	新しき明日の来るを信ずといふ／自分の言葉に／嘘はなけれど――	石川啄木
〃	はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ぢつと手を見る	石川啄木
〃	夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳吹かれけり	与謝野晶子
〃	草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり	北原白秋
〃	碓氷嶺の南おもてとなりけりくんだりつつ思ふ春のふかきを	北原白秋
〃	春白昼この港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり	若山牧水
〃	たゝかひに果てにし子ゆゑ、身に泌みてことしの桜あはれ散りゆく	釈迢空
〃	信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ	島木赤彦
〃	夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ	島木赤彦
〃	芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつつあらむ	長塚節
〃	おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとと柿の落ち葉深く	伊藤左千夫
〃	牛飼が歌詠む時に世のなかのあらたしき歌大いに起る	伊藤左千夫

## 5. お わ り に

以上、「高等学校学習指導要領」の改訂にともなって新しくできた「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」において、近代短歌が教材としてどのように扱われているかを調べてきた。この調査から判明したいくつかの点をここに記して結びとする。

## ア. 「現代国語」の場合との比較

「高等学校学習指導要領」は昭和53年8月30日に告示され、昭和57年4月から実施されたが、改訂前の「学習指導要領」に基づいて作られた「現代国語」の教科書に採られた近代短歌についての調査結果が、文部省編の『高等学校国語指導資料・教材と指導法』（昭和41年7月、東京電機大学出版局刊）に簡単ではあるが載っている。それは当時使われていた15種類の「現代国語」の教科書のうちで何種類の教科書がある歌人の短歌を採っているか、その教科書の数と、その歌人の短歌が延べにして何回載っているか、その回数を示したもので、次のようになっている。（歌人名のあとの数字が教科書の数、そのあとの括弧の中の数字は延べ回数である。）

晶子14（45）・茂吉14（41）・赤彦13（27）・啄木13（23）・牧水13（23）・白秋12（30）・子規12（33）・節10（24）・利玄10（22）・左千夫9（21）・迢空8（21）・文明4（15）・空穂4（11）・八一4（7）・夕暮3（9）・憲吉3（9）・信綱2（6）

＜ほかに、1社の教科書だけに採られた歌人として、直文・麓・千櫨・順・巖・寿蔵・修・章一郎・佐太郎の9名が示されている。＞

この「現代国語」の教科書の場合はⅠ、Ⅱ、Ⅲと3冊からなっているのに対して、新しくできた教科書は「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の2冊からなっている。そして、各社から発行された教科書の数も、「現代国語」の方が14種類であったのに対して、「国語」の方は17種類である。このように相違があるから両者を簡単に比較することは厳密に考えると適当とはいえないが、両者を並べて眺めることによって、大まかな傾向を察知することはできると考えられるので、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」についても、上記の「現代国語」の場合にならって、ある歌人の短歌を載せた教科書の数と、その歌人の作品の載った延べ回数を示すと、次のようである。

茂吉17（91）・啄木16（44）・晶子16（43）・白秋15（39）・牧水14（37）・迢空12（31）・赤彦9（22）・子規9（19）・節8（19）・柊二7（18）・芳美6（15）・文明4（14）・左千夫4（10）・八一4（9）・佐太郎2（6）・史2（4）

＜ほかに、1社の教科書だけに採られた歌人として、修司・佐美雄・たつゑ・修・夕暮・利玄・章一郎の専門歌人7名と、「朝日歌壇」入選歌の作者10名の計17名がある。＞

上に数字を示した、「現代国語」および「国語」の教科書にどの歌人の短歌が何種類の教科書に延べ何回載っているかの表を見ると、次のようなことが指摘できよう。

まず、4種類以上の教科書に短歌が載った歌人を2つの表から取り出してみると、両者とも14名に

なるが、その14名の歌人については両者の間に多少のちがいがあがる。「現代国語」の方で10種類の教科書に載っていた木下利玄、そして4種類の教科書に載っていた窪田空穂が、「国語」教科書では2人とも1種類の教科書に載るだけになって、上位14名の中から脱落し、それにかわって宮柊二と近藤芳美がはいり、柊二は7種類、芳美は6種類の「国語」教科書に作品が載るようになる。こんな変化はあったが、あとの12名の歌人たちは、順位にもそれほどの変化はなく、依然として主役を占めている。

「現代国語」の教科書の場合は、上位14位までにはいっているのは、ほとんどが明治・大正期に活躍した歌人たちで、わずかに土屋文明が昭和期に活躍した歌人といえるくらいであった。それに対して、「国語」の場合には、文明のほかに柊二と芳美が加わり、それぞれ約半数の教科書に採られている。

以上は、4種類以上の教科書に作品が載った歌人について眺めてみたのであるが、ここで3種類以下の教科書に載った歌人について調べてみると、「現代国語」に作品が載っていた、中村憲吉・佐佐木信綱・落合直文・岡麓・古泉千樫・川田順・岡山巖・鹿児島寿蔵の8名の短歌が「国語」では姿を消して、斎藤史・寺山修司・前川佐美雄・生方たつゑ・吉井勇・岡井隆の6名の歌人と、「朝日歌壇」の入選歌の作者10名の計16名が新しく出てきている。

このように、先の「現代国語」の教科書に比べると新しい「国語」の教科書においては、昭和期の歌人の作品が多くなっているのは事実であるが、全体としては、「現代国語」においても「国語」においても、明治・大正期に活躍した歌人の作品がやはり主流を占めていることにはかわりはない。この点は、同じ韻文の場合でも、昭和期の作品が大半を占めている詩教材の場合と大きなひらきがある。俳句教材の場合を眺めても、水原秋桜子・中村草田男・山口誓子・加藤楸邨・石田波郷・中村汀女・金子兜太らの昭和期の俳人の占めている比重は短歌の場合よりかなり大きい。近代短歌の教材として、昭和期の作品をどの程度「国語」教科書に載せるかは、さらに検討を要すると思われる。

#### イ. 茂吉作品の重視傾向について

「現代国語」の教科書においても、斎藤茂吉の短歌は14種類あった教科書のすべてに採られ、延べ回数にして41回と、晶子の14種類、45回に次いで2番目に多く載せられていた。こんどの「国語」の教科書になると、17種類の全部の教科書に載ったのは茂吉だけである上に、延べの回数を見ると、茂吉の91回に対して、啄木44回、晶子43回、白秋39回、牧水37回と晶子などの歌人に対して茂吉の方が倍を越す多さになっていて、「国語」教科書における茂吉短歌の重視の傾向が顕著に出てきている。

茂吉の場合、処女歌集『赤光』（大2）に収められた「死にたまふ母」などの歌の数々から、戦後の『白き山』（昭24）に載った「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも」などに至るまで、長年にわたって詠まれた多くの作品が人々に愛誦されて、近代短歌の最高峯と見るむきの多いことを考えれば、このように「国語」教科書に採られる回数が多いのも理解できないではない。しかし、「現代国語」の場合と比べると、他の歌人たちを圧して飛躍的な増加を示している。その原因の1つに、「国語」教科書において、茂吉の短歌が連作という形で、10首とか13首とかまとめて取り上げられていることが関係しているため、次にその点について考察することにする。

#### ウ. 連作短歌の掲載について

一般的に国語の教科書における近代短歌の教材というと、どんな短歌でも1つの独立した作品とし

て鑑賞されるのが普通で、1つの主題のもとに多くの短歌を構成的に配置した連作作品の場合でも、その中から、時には1首、あるいは2、3首を抜き出して鑑賞され、連作を構成するその中の1首ということはぬきにして、独立した作品として扱われる傾向が強かったのである。

ここで、茂吉の連作「死にたまふ母」について考えてみることにしよう。よく知られているように、この連作は茂吉の生母、守谷いくの死について歌ったもので、大正2年5月16日、母危篤の報を東京で受け取った茂吉は、ただちに山形県上山市金瓶の生家へと向かう。生家で数日のあいだ母を看取ったのちに母の死を迎え、葬儀をすまして同月30日に帰京するまでを、「其の一」から「其の四」までの4部に構成して、物語風に連作として展開させたものである。

この連作は、その1首1首を見ても、

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる  
 のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

などの秀作を含んでいる。母を失おうとする作者の強い感動を卓抜した表現技巧によって抒情的に歌ったこのような作品を1首1首ていねいに鑑賞することが、高等学校の国語の授業において大切なことはいうまでもないが、それと同時に、実母を失った悲しみを59首の連作として歌い上げている事実注目して連作の形で鑑賞する方法もあってよいと考えられる。

筆者はかつて高等学校の2年生の国語の授業で音楽をテープにより低く流しながら、生徒に59首全部を朗読させた経験をもつが、その授業に参加した生徒の中には「死に近き……」や「のど赤き……」などの名作を1首1首味わったときとは別の強い感動を覚えたと告白する者が多かった。

これは、59首の連作として1つにまとまることによって、1首1首単独に置かれたときとは別の情感が生まれ、それが大きな振幅となって読む者に迫ってくるからであろう。そしてまた、単独に読んだときに比べて、作者茂吉の人間像がいっそう鮮やかに浮かび上がってくるからであろう。

短歌史の上で、短歌の連作ということ意識的に唱え、みずから連作形式の短歌を数多く詠んだのは伊藤左千夫であった。左千夫は、「連作趣味」(明35)、「再び歌之連作趣味を論ず」(明35)、「連作乃歌」(明36)、「連作の歌に就いて」(大元)など数多くの連作の効用を説いた歌論を発表しており、作品としても、「鎌倉懐古」6首(明33)、「二月二十八日九十九里浜に遊びて」7首(明42)、「ほろびの光」5首(大元)など多く、彼の傑作と称されているような作品も、そのほとんどが連作形式で発表されている。

左千夫から短歌の指導を受けた茂吉も、連作についての歌論を、「連作」(明45)、「短歌連作の由来」(大元～8)、「連作論」(昭17)など、たびたび書いている。作品においても、処女歌集の『赤光』(大2)に「悲報来」10首、「死にたまふ母」49首、「おひろ」44首、「おくに」17首などの力作が収められており、以後の歌集にも連作が多く、茂吉が、師である左千夫の連作を重視する考え方を、歌論においても、実作においても継承し発展させていったことがわかる。

その点を考えると、こんどの「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の教科書において、数種類の教科書が茂吉の短歌を連作の形で載せていることは、意義ある試みとしと評価できる。

茂吉の作品を連作の形で掲げているのは、次の5種類の教科書である。

学校図書	「高等学校国語Ⅰ」	「死にたまふ母」	10首
教育出版	「国語Ⅰ」	「悲報来」	10首
光村図書	「国語Ⅱ」	「死にたまふ母」	12首
右文書院	「高等学校国語Ⅰ」	「死にたまふ母」	8首
筑摩書房	「高等学校用国語Ⅱ」	「死にたまふ母」	13首

このように、「死にたまふ母」を8首から13首抜粋して載せた教科書が4種類、「悲報来」連作10首をそのまま載せたものが1種類となっている。「悲報来」連作10首をそのまま載せた教育出版の「国語Ⅰ」のようにまるごと採ることが最も望ましいわけであるが、「死にたまふ母」のように59首もあると、教科書のページ数の都合もあるし、高等学校の国語の限られた時間の中で扱う教材でもあるので、その中から8首ないし13首を抜粋することはやむをえないことと考えられる。もとの59首の場合に比べて、連作としての効果が弱まることは否定できないが、上述のような条件を考慮してのぎりぎりの選択を行ったものと考えられる。こんどの「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の教科書に見られる連作形式の短歌の教材としての採用は価値ある試みとして評価できる。

#### エ. 朝日歌壇入選歌の採録について

先にも紹介したように、右文書院の「国語Ⅰ」は、「霧深き夜—新聞歌壇の歌—」と題して、「朝日歌壇」の入選歌の中から若い世代の作品や、彼等とかかわりの深そうな作品を選んで10首を教材として載せている。また、筑摩書房の「高等学校用国語Ⅱ」は、「無名者の歌」と題して、朝日歌壇の選者を長年にわたってつとめてきた近藤芳美が若い世代の作った入選歌を10首選んで鑑賞したあとに、別に入選歌7首を添えている。鑑賞文の末尾に添えられてはいるが、教材に準じた扱いを期待しているのであろう。

そこに掲載された入選歌の中には、まず右文書院の「国語Ⅰ」を見ると、

かなしみを天になげうちはればれとブランコふみぬ風きりてふむ 金田千恵子

君をふと大人に見せて冬の陽は校舎の影にはや沈みたり 入江君子

などといった作品が見られ、筑摩書房の「高等学校用国語Ⅱ」には、上に示した金田千恵子の「かなしみを……」の歌のほかに、

魚売り悲しきまでに生臭き父を愛する末娘われは 西山せき子

肩を触るる近きに坐れど君はただ受験のことを吾わがに問いけり 吉岡めぐみ

のような作品が載っている。

これらの短歌は高校生と同じ年頃の人々の作品であり、また歌われている題材が身近なことなので、生徒たちの共感を得やすいと思われるものが多い。専門歌人の作品に比べると表現にあいまいなところがあるなど、いろいろ問題がないわけではないが、高等学校の国語の授業において、これらの歌について活発な話し合いを展開させることも比較的容易であろう。また、こんな歌なら自分にも作れそうだと作歌意欲を生徒に持たせることも期待できる。中・高年齢層においては近年、短歌結社・新聞歌壇・文化講座などで短歌人口の増大が伝えられているのに、高校生・大学生といった若い世代においては、小説・詩などのジャンルに比べると、近代短歌は親しまれているとはいいいにくい状況にある。

そういう現状を考えると、高校生と同じ世代の人々の詠んだ、身近な題材を扱って共感を得やすい新聞歌壇の入選歌を教材として取り上げた、右文書院や筑摩書房の教科書の編集は評価すべきであり、新聞歌壇入選歌にとどまらず、近代短歌教材の多角化を今後も図っていく必要があると考えられる。